

Samgaha

サンガジャパン JAPAN

Vol

27

2017
Summer

デイビッド・チャドウィック

鈴木俊隆 老師と ビートニクの 詩人たち

特集

禅

世界を魅了する
修行の系譜

佐々涼子
横田南嶺

井上貫道 / 鈴木包一
細川晋輔 / 永沢哲 / 坐禅会ガイド

アルボムツレ・
スマナサーラ ×
藤田一照

鈴木俊隆老師と ビートニクの詩人たち

作家 デイビッド・チャドウィック

翻訳：編集部

アメリカの一九五〇年代から七〇年代初頭にかけて、ビートニク／カウンター・カルチャー／ヒッピームーブメントの渦中において、鈴木俊隆は坐禅を伝え、現代に続く深い影響を与えた。多くの著名な文化人、ビート詩人が俊隆のもとを訪れ、交流したその様子を、直弟子であり俊隆の評伝『Crooked Cucumber』の著者でもあるデイビッド・チャドウィック氏に寄稿いただいた。

1. 鈴木俊隆老師。1969年、アジア以外ではじめての禪院であるタサハラ禅マウンテンセンター（禅心寺）にて

鈴木俊隆とアメリカの出会い

まず鈴木老師のプロフィールをご紹介しておこう。鈴木俊隆（一九〇五—七二）は曹洞宗の僧侶だ。彼はアメリカに渡る前は静岡県焼津市にある曹洞宗の寺院、林叟院りんそういんの住職だった。一九五九年五月、鈴木老師はサンフランシスコに渡る。曹洞宗の命を受けて、当地に住む日系アメリカ人のための寺院だった桑港寺そうこうじの住職となった。まもなく人びとは鈴木老師とともに桑港寺で早朝に坐禅を始めた。そのほとんどが寺院とは関係のない人びとだった。鈴木老師が強調したのは、クツション（坐布）の上だけでなく、日常生活の中に禅を導入し実践すべきだということだ。一九六二年、鈴木老師と彼の弟子たちは「the Zen Center（禅センター）」を設立した。これがのちに「サンフランシスコ禅センター」となる。一九六七年七月には、サンフランシスコ南方の山奥の温泉地タサハラに、「禅マウンテンセンター（禅心寺）」を創立した。これは西洋で初めての禅院とされる。ここでは男女がわけへだてなく、ともに修行に励むこととなった。鈴木老師は一九六九

年一月に桑港寺の職務から退くまで、桑港寺と禅センターの二つのグループの住職を続けた。その後、妻のみつとともにセンター近くに移り、そして禅センターの購入した寺に移った。一九七一年二月、鈴木老師はシテイ・センター（サンフランシスコ禅センター・発心寺）の自室で遷化された。

鈴木俊隆老師が遺したものは測り知れない。サンフランシスコ禅センターはその後も発展を続けた。そしてそれと共に、アメリカをはじめ、ヨーロッパやそのほかの地域に、禅院やセンター、坐禅のグループが生まれ、広がり続けている。鈴木老師の法統は、男女問わず、僧侶や在家の人びとによって伝えられ、それ以外にも多くの人々が、鈴木老師の著作を読み、オンラインで教えを学び、自宅で瞑想を行っている。

鈴木老師は、アメリカやその他の国々に、曹洞禅の開祖・道元の実践と悟りをもたらすことに成功したが、これは多くの先駆者の手で豊かな土壌が用意されていたおかげもある。そうした人たちのなかでも重要なのが偉大な学者であるD・T・鈴木（鈴木大拙、本名は貞太郎。一八七〇—一九六六）だ。禅と仏教に関する彼の数多い著作は、すでに広く西洋で読まれていた。俊隆老師は自らを「スモールスズキ（小鈴木）」と称し、大拙を「ビッグスズキ（大鈴木）」と呼んでいた。とても多くの西洋人が、禅、仏教、ヒンドゥー教、その

他のアジアの叡智と文化に対して、オープンな態度を取るようになったが、これにはビート・ジェネレーション（ビートニク beatnik）^{*1}の貢献も少なくない。

鈴木俊隆とビートの巨人

アレン・ギンズバーグ

アレン・ギンズバーグ (Allen Ginsberg : 一九二六―一九七) は、最も有名なビート詩人だ。彼が代表作である詩「吠える (Howl)」の最初の朗読を行ったのは、詩人ケネス・レックス・ロス (一九〇五―八二) の仕事場で、一九五五年一〇月のことだ。この場所はしばしばビートの起源とされるのだが、桑港寺からさして遠くないところに位置している。ギンズバーグは何ものにもとらわれずまた執着をしない、そしてとても強い魂をもっていた。彼は一九六〇年代前半に時折、禅センターに現れては坐禅を組んでいた。

僕はかなり最初期に禅センターに通って坐禅をしていたよ。鈴木老師がまだ桑港寺にいた頃だ。日系人もアメリカ人もやってきては交じりあって一緒に坐っていたね。僕はそれ以前に、「京都の」大徳寺で少しだけゲイリー「スナイダー」(Gary Snyder)と一緒に参禅したことがあるし、他の場所での経験もあったけど、アメリカで坐ったのは、禅センターがはじめてだったんだ。

禅センターはギンズバーグにとつてはいささか堅苦しかった。というのは彼は瞑想中にシンバル(鐃鈸)を鳴らし、心のままにチャンティング(経典読誦)し、ヒンドウの歌を詠唱するのを好んだからだ。しかしそれでも彼は禅センターでの修行と鈴木俊隆に対する敬意をもっていた。また彼は、朝に三度と夕方に一度、坐禅のあとで詠唱されるハートスートラ(般若心経)の響きに魅せられていた。私たちは経典の書かれたカードを掲げてチャンティングしていたのだが、そのカードには日本語の漢字と読誦(音読)用のローマ字が併記され、それに鈴木老師が翻訳した英語が書かれていた。私たちはその、鈴木老師の解釈がこめられた英語をチャンティングすることはなかった、ギンズバーグによればそれはすばらしく詩的な翻訳だった。

一九六八年のことだね、僕は鈴木老師の翻訳に強く惹きつけられたんだ。それまで読んだことのある翻訳に比べると、ちよつと電報を思わせる文体なんだ。とても簡潔だった。それで、鈴木老師を訪ねて、彼の前で歌つて、これを公衆の前で歌つていいか許可を求めたんだ。彼は、「どうぞ」と言ってくれた。僕はそこに、少しだけアメリカ風のメロディと気分を加えていた。抑揚と旋律を使うことで「苦しみもなく、苦しみの原因もない」というところを強調したんだ。まるでオペラみたいだね。それから「得るといふこともない」の部分もそうで、この部分が心情的には全編の核心だと思ふ。それで、僕は公衆の面前で歌うことの許可を彼からもらったんだ。自分ではきちんと理解も認識もできないような何かを、ただ弄もてあそんでいただけなのはわからない。ただ、僕が誰に対して、どんな脳へのダメージも与えたくはないということを、それを確かなものにするために、彼に伝えておくのがよいと思つたんだ。鈴木老師はとても気持ちよく対応してくれたよ。

摩訶般若波羅蜜多心經
MA KA HAN NYA HA RA MIT TA SHIN GYO
Great Prajna Paramita Sutra

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五
KAN JIZAI HO SAKU GYO JIN HAN NYA HA RA MIT TA SHI SHI KEN GO
Avalokitesvara Bodhisattva practice deep prajna paramita five elements

窺皆空度一切苦厄
KAI KU DO ISSAI KU YAKU
stare all empty every every suffer

舍利子色不異空空不異色色
SHI RI SHI SHIKU FU I KU KU FU I SHIKU SHIKO
Saripati, form not different (from) emptiness, emptiness not different (from) form, form

即是空空即是色受想行識亦
SOKU ZE KU KU SOKU ZE SHIKU JU SO GYO SHIKU YAKU
is the emptiness, emptiness is the perceptions, perceptions is

復如是
BU NYO ZE
like this

舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨
SHI RI SHI ZE SHO KU SO FU SHO JU METSU FU KU FU JO
Saripati, this everything original character: not born, not annihilated, not stained, not pure,

不增不減是故空中無色無受想行
FU ZO FU GEN ZE KU KU CHU MU SHIKU MU JU SO GYO
(does not increase, does not decrease, therefore, in emptiness no, perceptions, thought, sensory substance,

識無眼耳鼻舌身意無香味觸法無眼
SHI MU GEN NI BI ZETS SHIN NI MU SHIKI SHO KO MI SOKU HO MU GEN
perceptions, no eye, no ear, no nose, tongue, body, mind, no color, smell, touch, objects, no eye,

界內至無意識界無無明亦無無明
KAI NAI SHI MU I SHIKI KAI MU MU MYO YAKU MU MU MYO
world of eyes until we enter to also no world of consciousness, no ignorance, also no ignorance

盡乃至無老死亦無老死盡無苦集
JIN NAI SHI MU RO SHI YAKU MU RO SHI JIN MU KU SHU
meditations, until we enter to no, old age, death, also no, old age, death, abolition of all suffering, cause of suffering,

滅道無智亦無得無所得菩提薩婆依
METSU DO MU CHI YAKU MU TOKU I MU SHO TOK KO HO DAI SATTA
extinguish, no wisdom, also no attainment because of no attainment, Buddhists, depends on

般若波羅蜜多故心無主礙無圭碍故無有恐怖違離
HAN NYA HA RA MIT TA KO SHIN MU KE GE MU KE GE KO MU U KU FU OH RI
prajna paramita because mind not attached, because of no obstacle no fear, fear get beyond

一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸仏依般若
ISAI TEN SO MU SO KU GYO NE HAN SAN ZE SHO BU FU I SHI
(perception/sensory) error, illusion, Nirvana, Past, present and future every Buddha, depend on prajna

若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提
NYA HA RA MIT TA KO TOKU A NOKU TA RA SAN MYAKU SAN BO DAI
prajna because attain supreme perfect enlightenment

故知般若波羅蜜多是大神呪是大明呪
KO CHI HAN NYA HA RA MIT TA ZE DAI JIN SHU ZE DAI MYO SHU
Therefore I know Prajna paramita (is) the great holy mantra, the great mystic mantra, is

是無上呪是無等等呪能除一切苦真実不虛
ZE MU JO SHU ZE MU TO SHU ZE MU TO SHU ZE MU TO SHU ZE MU TO SHU
the supreme mantra, the most-powerful mantra, is capable of erasing all suffering, true

故說般若波羅蜜多呪即說集異曰
KO SETSU HAN NYA HA RA MIT TA SHU SOKU SETSU SHU WATSU
Therefore its proclaimed Prajna paramita mantra and proclaimed mantras says

揚歸揚歸波羅揭諦波羅揭諦菩提薩婆訶
GYA TE OYATE HA RA OYATE HA RA SO OYATE SO DHI SO WA KA
gone, gone, in the other shore gone, reach (to) enlightenment accomplish

般若心經
HAN NYA SHIN GYO

願はくはこの功德を以てあまねく一切に及
NEGA WA KU WA KO KU DU KO O MOTTE A MA NE KU ISSAI NI OYO
What we pray, this merit with universality all occasion, pervade,

はし我々と衆生とみなともに仏道を成ぜんこと
HO SHI WAKARE TA TO SHU JO TO MI TA MO NI BU TO DO O JYO ZEN KO TO
and sentient being, all together, we shall attain Buddhahood, all together

願はくは我々と衆生とみなともに無量阿僧祇劫
NEGA WA KU WA KO KU DU KO O MOTTE A MA NE KU ISSAI NI OYO
I pray that I and all sentient beings together, over infinite eons, together, shall attain Buddhahood.

十方三世一仏一切諸尊菩薩摩訶薩
JU HOU SAN SHI I SHI SHU SHON SHI SHI
Ten directions past, present and future all Buddhas, all Buddhas, all Buddhas

摩訶般若波羅蜜
MA KO HO RA HO RO MI
Great Prajna Paramita

2. 漢字の下に発音がローマ字で書かれ、その下に英語の意訳が書かれた般若心経

ゲーリー・スナイダー

ゲーリー・スナイダー (Gary Snyder : 一九三〇—) は、一〇代の頃から大自然とネイティブ・アメリカンの文化を愛し、学んできた。彼はオレゴン州のリード大学の学生だったが、ルー・ウェルチ (一九二六—七二) や、ルームメイトのフィリップ・ウェイレ (一九二二—二〇〇二) らの詩人と親しかった彼は、大学時代に最初の詩を出版する。東洋や仏教に対する彼の興味がかき立てられたのも、大学でのことだ。一九五〇年代の中ごろ、彼はカリフォルニア大学でアジア研究に携わると、サンフランシスコの北の森に囲まれた小さな禅堂で、ジャック・ケルアックと一緒に暮らしていた。彼は禅堂を「Marin-an」*₄と呼んでいた。

数年間にわたる京都での禅の研究と翻訳の仕事から戻ると、スナイダーは桑港寺からほんの数ブロック離れたところではばらく暮らしていた。彼は桑港寺で坐することもあったが、それは彼にはあまり快適なことではなかったようだし、また禅としても彼本来の流儀とはいえなかった。彼は、彼の教師たちの流派である臨済禅のほうをつねに好んでいたからだ。しかしそれでも、スナイダーと鈴木老師はとても仲がよかった。

鈴木老師は弟子たちとはいつも英語で話していたので、スナイダーや彼の二番目の奥さんである雅と日本語で話せるのは、俊隆老師にとって特別なご馳走みたいなものだった。スナイダーは、一九五九年の手紙のことを思い出ししてくれた。

私をはじめ鈴木老師のことを知ったのは、私が京都の大徳寺のそばに住んでいた頃、ジョアン・カイガー (Joanne Kyger)*₅ からの手紙でだったよ。彼女は鈴木老師がサンフランシスコに到着するとほとんど同時に、ある朝、何人かと一緒にいちばん最初に老師を訪ねたと言っていた。私は一九六九年に帰国したとき、何度か彼の禅堂に行って坐ったよ。それからパイン・ストリートの私の家では、昼食をともにして語り合い、ゆかいな時間を過ごした。アメリカ人の弟子たちが、どれほど極端に真面目で、コチコチで、物欲しげで、完全主義者であるかということや、ダルマが実際はいかに大らかで愉快なものかを話し合ったものさ。

フラワー・パワーと鈴木俊隆

ヒッピー現象はマリファナとLSDに関連づけられるが、実際それは事実だ。しかしそれと同時に、ビート・ジェネレーションや公民権運動、ヴェトナム反戦運動、環境保護運動、そして物質至上主義的な社会の価値観への漠然とした不満に根差してもいた。

その歴史的転換点、フラワー・ムーブメントを生み出した「フラワー・パワーの革命」の転機となったのは、一九六七年一月一四日、サンフランシスコのゴールデンゲートパークで行われた「ヒューマン・ビー・イン (Human Be.in)」^{*}というイベントだ。日本から一時帰国していたゲリー・スナイダーはその場にいた。鈴木老師もまたそこにいた。ギンズバーグはこう回想する。

鈴木老師は壇上に姿を現した。老師はその午後のほとんども瞑想して坐り続けたんだ。彼は僕の左、僕がいて、それからマイケル・マクルーア（一九三二—）、

3. 1967年1月14日にサンフランシスコのゴールデンゲートパークで開催されたヒューマン・ビー・インの様相。写真手前左のスキンヘッドの後姿は鈴木俊隆



ゲーリー・スナイダー、モレッタ・グリアと続いていた。モレッタは僕の当時のガールフレンドで、インドで長い時間を一緒に過ごした人だ。それから、ティモシー・リアリー^{*}たちがやってきた。僕はいつもゲーリーの言ったことを思い出すんだけど、彼によれば鈴木老師が来てくれたのは本当に驚くべきことだ。なぜなら、何かしら真剣で、興味深く、注目に値するものがあると老師が考えたのであれば、ビー・インのような、そんな奇妙な公衆の集会に姿を現すなんてことはなかっただろうからさ。

多くの弟子が禅センターから鈴木老師に随行した。私たちは鈴木老師を、妻のみつさんから引き離さなきゃならなかった。彼女は、そんな集会は老師には荷が重過ぎるし、おそらくいそうな物議を醸すものだと考えていたんだ。いつもなら彼女の意見が通るところだけど、鈴木老師は興味津々だった。彼の多くの弟子たちが、その自由奔放なサブカルチャーと少なからず関係を持っていた。鈴木老師の目には、彼らは、いったん坐禅と修行に取り組み始めると、それまでのやり方を忘れてしまいがちな、真剣な修行者と映っていた。鈴木老師は「ビー・イン」についての感想をほとんど口にされな



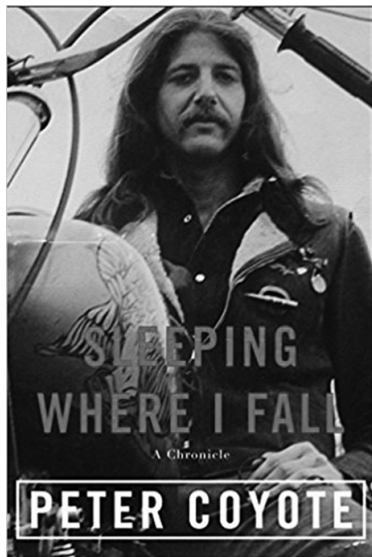
4. ヒューマン・ビー・インの舞台上でのアレン・ギンズバーグ（右から3人目）とゲーリー・スナイダー（一番左）



5. ヒューマン・ビー・インの会場に姿を見せた鈴木俊隆

かったけど、それはもともと寡黙な方だったせいもある。私は思うのだけど、そのような吉祥のイベントに参加したことを、喜んでいたのじゃないだろうか。ギンズバーグは言う。

まったく素晴らしかったよ。あの場所には瞑想のイベントがあった。そしてその終わり方もやはり最高だった。僕とゲーリーは「オーム・シュリー・マイトレーヤ」を唱え、日が沈み、帰るときにはみんながゴミを拾ってチリ一つ残っていないかった。こいつはキツチンヨーガというんだ。



6. ピーター・コヨーテ
『Sleeping Where I Fall』の表紙

ピーター・コヨーテ

街頭劇から劇場の舞台、そして映画（『E.T.』など一四〇本に出演）と活躍する俳優。ピーター・コヨーテ（一九四一—）は、詩人のデ・プリマと同じ「デイガー」*の一人だ。彼は環境保護論者、進歩的な政治活動家にして、作詞家・作家でもあるが、ゲーリー・スナイダーの導きによって禅にターノンした。彼は著書『Sleeping Where I Fall』（転んだ場所で眠る）の中で、あの日のことに触れている。

ペイズリーの垂れ幕や、マリファナの葉っぱの形を染め抜いた旗がパタパタと、さわやかな風に吹かれて翩翩へんぺんとひるがえっていた。それはセレブやEDPsエドプス（ハイト・イン・ディペンデント・プロブライアター）*やらでござった返す、たった一つの演壇の前に集まった五万人の人々を、祝福しているように見えた。ジェリー・ルービン*10はカウンター・カルチャーの「政治的側面」を代表し、ティモシー・リアリーとリチャード・アルパート*11は、意識の拡張と至福を代表していた。そこには詩人のゲリー・スナイダーのような、数少ない本物の予見者、アーティストも混じっていた（彼は日本での一〇年にわたる禅研究から戻ったところだった）。そして彼の悪友、アレン・ギンズバーク。禅の達人・鈴木俊隆老師は、近隣のサンフランシスコ禅センターの長にして、岩のように堅固……

私が俊隆老師の生涯をつづった評伝『Crooked Cucumber: The Life and Zen Teaching of Shunryu Suzuki』か¹。

一人の若い女性が鈴木老師に、ネイティブ・アメリカン起源と伝えられる、棒の先に六角形のカラフルな宗

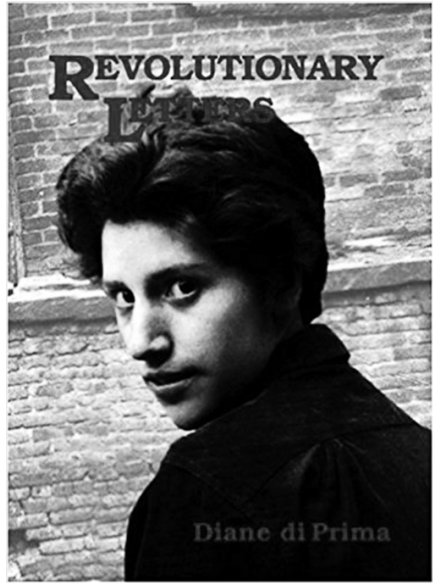
教的シンボルがついた「god's eye（神の目）」を手渡した。老師はすこししてそれを次の人に送った。すると誰かが一輪の花を老師に渡した。老師はその花を手にして坐り、そしてフラワー・チルドレンと音楽、理想主義的なスピーチを楽しんだ。しばらくすると鈴木老師はその場を離れ、家へと戻った。

ダイアン・デ・プリマ

鈴木俊隆老師と出会うことになったすべての詩人のうち、ダイアン・デ・プリマ（一九三四―）ほど老師と近しくした人はいない。彼女には『あるビートニクの思い出』という自伝がある。「デイガー」の一人でもあった。「デイガー」は、フリードを提供したりフリーコンサートを企画したりしていた過激なアナキストグループだ。デ・プリマは、一九七一年に鈴木老師から在家の戒を授かっているが、老師と初めて会ったのは一九六二年のことだ。

彼女はこのように書いている。

鈴木老師とはじめてあったとき、私は私の中の基底



7. ダイアン・デ・プリマの代表作
『Revolutionary Letters』の表紙

ちや街が徐々に目を覚ますあいだ、我々とともに坐った。そしてお経のチャンティングのあと、老師は扉のところ立って一人一人にお辞儀をしながら、去りゆく我々を鋭くかつ穏やかに注視していた。老師の気づきを免れることは何一つないのだと感じた。我々のお辞儀の仕方、我々が帰路に就く際に示すためらい、自意識、虚勢などが、我々がどの「ステージ」にいるかを残らず明かしてしまう。鈴木俊隆老師から学んだ数年の間に、私は知っていることよりもはるかに多くを学んだし、今ですらそう思う。

鈴木老師を導いた加藤和光

にまつすぐたどり着いた。今までも何度か言ってきたことだが、もし鈴木老師がリング摘みや溶接工だったとしたら、私もすぐさまその仕事に取りかかっていただろう。私が坐禅をしたのは、老師が坐っていたからだ。彼の心を知るためだ。私の二八年の人生で、誰かに会って信頼を覚えたのはそれが初めてだった。老師との出会いは私の、強固で洗練された、若い芸術家としての心を、一瞬で吹き飛ばしてしまった。鈴木老師は毎朝、ブツシユ・ストリートの古い日本の寺で、鳥た

鈴木老師と世に言うビート・ジェネレーションとの出会いは、実際のところ一九五九年の五月二三日、鈴木老師がアメリカに到着し、空港で桑港寺の日系アメリカ人のメンバーたちの出迎えを受けた日にはじまった。彼らの中にはすぐれた人々もいたが、思い出せる限り、「ビート」『ヒップ』の部類に入る人は皆無だった。だがここでは、加藤和光（わとう かずみつ）を桑

港寺のメンバーに数えていない。加藤は曹洞宗の若い僧侶で、カリフォルニア大学バークレー校の院生でもあったが、前の住職だった鳥羽瀬保道（はとう）が日本に帰国して以来、一年半にわたって桑港寺の寺務に携わっていた。鈴木老師を迎えた加藤は、寺務から解放されてほっとしていたが、その後数年にわたって桑港寺で鈴木老師を支え続けた。加藤は、この小柄な新しい住職のために、数多くの新たな扉を開くことになった。

加藤はすぐに、A A A S (The American Academy of Asian Studies) で担当していたクラスの一つに鈴木老師を連れていき、その夜の授業を代わってもらうことにした。鈴木老師はクラスの全員に床で坐禅を組ませ、うち三人の女性が生涯にわたる弟子となった。加藤はすでにゲリー・スナイダー（当時は日本に滞在中）と知り合っていたが、スナイダーはA A A Sで、アレン・ギンズバーグ、マイケル・マクルーア、フィリップ・ウェイレンなどと一緒に学んだことがある。彼らの近い同僚で、自身がカウンター・カルチャーのアイドゥル的存在であり、A A A Sの元学長でもあったアラン・ワッツ（一九一五―七三）は、『ウェイ・オブ・ゼン（禅の道）』などの数多くの著作を通じて禅を広く伝えた。この本を書く際、ワッツは加藤をアシスタントとして雇っている。ワッツによれば、「A A A Sは、のちの六〇年代前半に（サンフランシス

コルネッタンズ）として知られたものの、主要な根源の一つである」。加藤は鈴木老師をワッツに紹介し、彼らほどよい関係を築いた。ワッツは禅センターの支援者にして、鈴木老師の腹心の友でもあり続け、求道者たちを老師のもとに導くことも珍しくなかった。

ビート詩人たち

鈴木老師によれば、彼の最初の弟子はビル・マクニールで、カウンター・カルチャーの業界ではよく知られた精神的な若手アーティストだった。マクニールは数多くの人間を桑港寺での参禅に導いた。その一人が詩人ジョアン・カイガーで、ゲリー・スナイダーに手紙で鈴木老師のことを知らせた人物だが、その後すぐにスナイダーの妻として日本に行くことになる。

カイガーは回想する。

私は坐禅をしに通いはじめ、ブルース・ポイドと一緒に早朝に坐るようになった。彼は詩人で、ノース・ビーチ*12のシーンの人物だ。私たちは朝の五時半とか、とてもない時間に出かけていった。私は「イースト・ウエ

スト・ハウス」に住んでいて、日本に向かう準備が整いつつあり、そろそろ禅を学んでもいい頃だと思ったのだ。カリフォルニア・ストリーートの「イースト・ウエスト・ハウス」には、当時さまざまな人々が出入りしていた。長年仏教を学び、「イースト・ウエスト・ハウス」を始めたクロード・ダレンバーグ（一九二七—二〇〇八）がいて、それ以外にもルー・ウエルチ、馮家福^{フエンジャフ*13}（一九一九—八五）、フィリップ・ウエイレンらがいた。それはアジア研究に関心を抱いていた人々にとって、共学の寮みたいなものになっていた。そこには当時入手できる仏教関連の英語文献を揃えた、素晴らしい図書室があった。そこに収まり切らない分は、素晴らしい図書室がナン・ストリートに開いた「ハイフン・ハウス」行きになった。ちなみにこの名前は、「イースト・ウエスト」の間のハイフンの意味である。

数ブロック離れた場所で、鈴木老師は参禅会を始めていた。老師は早朝に現れたが、当時はほとんど英語を扱えなかったので、何をすべきかを身振り手振りで教えていた。時間通りに起きて顔を出すのは、私にはなかなか難しいことだった。ずいぶん頑張って、鈴木

老師にさしあげようと薔薇を手に出かけたこともあるが、その日、寺は閉まっていた。何度もノックを繰り返したあと、老師は戸口まで出てきて、四と九がつく日は参禅がないのだと、どうにかこうにか説明してくれた。ゲリー・スナイダーのマリン郡の小さな禅堂での体験を除けば、それが私にとって初めての正式な参禅だった。

その頃は、禅の「悟り」や公案にただならぬ注目が集まっていた。五〇年代後半という時代に特有の、あの熱狂だ。私たちはD・T・鈴木の本を読み漁っていたが、いかに「ただ坐る」か、を実際に教えてくれる人物が現れたのだ。その後、私は四年間日本に行き、大徳寺の龍泉庵^{りゅうせんあん}にあるルース・フラー・佐々木の寺で、臨濟宗の外国人グループとともに参禅することになった。

一九六四年に日本から戻ったとき、鈴木老師のもとで参禅を再開しなかったことを残念に思う。私は画家のジャック・ボイスに会い、彼は今や本物のサンガを主宰していた鈴木老師のもとで坐禅を始めた。それは接^{せつ}心のある、よくできた小人数の坐禅会で、当時、ドナ

ルド・アレン^{*15}（一九二二—二〇〇四）も、彼らと一緒に参禅していた。彼は『ニュー・アメリカン・ポエトリー』^{*16}の編集を終えたところだった。

交流の深まり

鈴木老師はたまたまアメリカの一寺院の住職として招かれたわけだが、そのことが彼を、ワッツが「アメリカン・ルネッサンス」と呼んだもののまさに中心に押し出すことになった。世界の他のどの場所にも、影響力のある知識人や芸術家がこれほど集中して住んでいたところはない。彼らは鈴木老師とともに修行を積み、老師の禅が広まる手助けをするのに熱心だった。カイガーが触れた人物のうち、クロード・ダレンバーグ（ケルアックの小説『サ・ダルマ・バムズ』に登場する、バド・ディーフェンドルフのモデル）は、ワッツに従ってシカゴからサンフランシスコに移ると、長年にわたって桑港寺にかかわり、前代の住職である鳥羽瀬に学んでいた。ダレンバーグは、一九六六年に鈴木老師のもとで得度した。ドン・アレン（前出のドナルド・アレン）は編集者として、ビートニクが知名度を上げるうえで一役買った。フィリッポ・ウエイレンは、多くの人々がお気に入りのビート詩人と

して挙げる人物だが、彼はこのように回想する。

僕がはじめて鈴木老師を見かけたとき、アルバート・サイジヨウと僕は、ハイフン・ハウスの窓から外を眺めていたんだ。すると、茶色の長い衣を纏^{まと}って異国の帽子をかぶったさ、小柄な男が舗道を歩いて行くのが見えたわけさ。アルバートは言ったよ。「あつ、あれは鈴木老師だ。桑港寺の新しい住職だよ」

ウエイレンによれば、サイジヨウは禅堂で彼を鈴木老師に紹介し、一九六〇年に老師が執り行った結婚式の際にも一度会っている。ウエイレンはある朝、クロード・ダレンバーグと一緒に禅堂に行って坐ったが、その後、彼らはリチャード・ペーカー^{*17}と一緒にネヴァダ・シテイの森の中の地所を見に出かけた。ペーカーとアレン・ギンズバーグ、ゲリー・スナイダーは、そこに一区画ずつ土地を買ったが、「シテイ・ボーイ」だったギンズバーグは彼の分を売ってしまった。スナイダーはそこに自宅と禅堂を建て、今も住み続けている。別の機会に、ウエイレンはスナイダーかダレンバーグと一緒に禅堂で参禅し、終了後は他の参加者と同じく鈴木老師と礼を交わしたが、彼の目には老師は物静かな好人物とし

か映らなかつた。彼は鈴木老師の曹洞禪に関心がなかつた。日本に何年か滞在し、一九六九年の前半に帰国したあとの出来事を、彼は覚えてゐる。

ゲーリー・スナイダーが近所に住んでいてさ、日曜の朝食に来て、鈴木老師の法話を聞きに行かないかというんだよ。僕はオーケーと答えたさ。僕はゲーリーとマサと一緒に朝食を食べてからさ、桑港寺に出かけて行って、一階の大講堂で老師の法話を聞いたんだよ。人が多かつたんで後ろのほうに坐つたんだけど、話がよく聞こえたねえ。鈴木老師は日光菩薩と月光菩薩の話をしたんだけど、これが実に素晴らしいんだ。その法話を聞いてしまったからさ、僕は、今まで桑港寺に行つて鈴木老師と話そうという気にならなかつたのは、とんでもない失敗だつたと感じたよ。

それでもウエイレンは日本に戻る計画を変えなかつた。鈴木老師が遷化されて数カ月後、ウエイレンはサンフランシスコ禅センターに移り（私の部屋からはホールの向かい側だった）、得度して老師の後継者リチャード・ベーカーの弟子になつた。ギンズバーグはちよくちよく出入りしていたし、時

にはダイアン・デ・プリマも加わつて散歩をすることがあつたが、私もそれにつき合つたものだ。ベーカーの代になつてから、すでに基盤を確立していた禅センターにかかわる詩人やアーティストたちの流れは、むしろさらに太いものとなり、ユニークな人物が加わることになつた。

リチャード・ベーカー

リチャード・ベーカー（一九三六―）は一九六一年にはじめて桑港寺にやつてきて、ドン・アレンと一緒に引越してきた。アレンがいたニューヨークのグロウヴ出版社は、ヘンリー・ミラーの本を出すかたわら、ビートの数多くの作家たちの本も出版していた。一九六五年、ベーカーはカリフォルニア大学において、記念碑的なバークレー詩^{ポエトリー}会^{カンファレンス}議を組織し、ドン・アレンや詩人ロバート・タンカン（一九一九―八八）とも親しく交わつた。その後、彼はやはり大学で、LSDをテーマにした大規模な会議を主催した。一九六六年前半に、彼は鈴木老師を連れてタサハラを訪れ、秋までには（リトリートセンター建設の）資金獲得運動が始まつていた。彼を含む一〇人超の面々にゲーリー・スナイダーが加わり、山岳地方へ四時間のドライブをしては、タサハラ用地と周囲

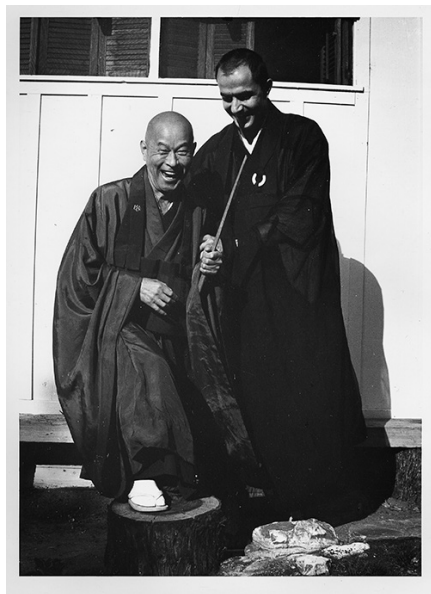


8. 1967年秋、タサハラの禪マウンテンセンター（禪心寺）

の荒れ野の具合を確認していた。

スナイダーやワッツ、その他の著名な詩人、アーティスト、それにグレイトフル・デッド、ビッグ・ブラザー&ホールディング・カンパニーとジャニス・ジョプリン（一九四三—七〇）、クイックシルヴァー・メッセンジャー・サーヴィスといったバンドが、禪センターのタサハラ購入の資金調達に協力してくれた。ギンズバーグがボブ・ディラン（一九四一—）と話したところ、ディランはそこに自宅を建ててもよければ、その土地の全域を我々のために買ってほしいと提案してきたという。タサハラでは、伝統的な修行の時期とゲスト・シーズンを設けていた。ゲストを迎える準備を整えた途端、ジェファソン・エアプレインがやって来た。作家のハープ・ゴードはジャガーに乗って訪れ、それを我々への贈り物に残して行った。詩人リチャード・ブローティガン（一九三五—八四）は最初期に訪れ、自然と温泉をエンジョイしていった一人だ。私はマイケル・マクルーアと一緒に流れに沿って歩き、彼はガイドとして食用やお茶になる植物を教えてくれた。

マイケルは最初、友人のデーブ・ヘーゼルウッドとともに、カンザスのカウンター・カルチャー詩壇^{ポエトリー・シーン}から、カリフォル



9. リチャード・ベーカー（右）と鈴木俊隆（左）

ニアにやって来た。彼らはすぐにベイ・エリアの同好の士たちと親しくなった。ヘーゼルウッド（一九三二—二〇一四）は、雑誌『アウエルハーン』^{*}を発刊し、マクルーア、ウェイレン、ルー・ウェルチらの詩の美しい本を出版した。彼は出版を通じてリチャード・ベーカーを知り、一九六三年か六四年に鈴木俊隆老師の弟子になった。

桑港寺で参禅したあと、我々が小部屋を通り抜けると、鈴木先生（当時、我々は老師をそう呼んでいた）がいて、皆が先生に向かって合掌し、我々も合掌を返した。

時々、カリフォルニア半島で花の栽培ビジネスに携わっていた日本人メンバーが、先生に満開の花束を渡すこともあった。ある時はそれが牡丹の花だったのを思い出す。目にした時は驚いたものだが、先生が花を置くと、先生に向かって礼をする際、実際は花に向かって礼をしているような具合になった。とても美しい。またある時は、何百もの花をつけた大きなシンピジウム蘭だったのを思い出す。先生は花の中に埋もれたみたいだった。それは私にとって、まさに鈴木先生を象徴するように思えるのです。

後年ヘーゼルウッドは曹洞宗の禅僧となり、サンフランシスコ北方の町コウターティで、小さな集団を組織することになった。マクルーアは彼の近しい友であり続け、ヘーゼルウッドの法話を高く評価している。

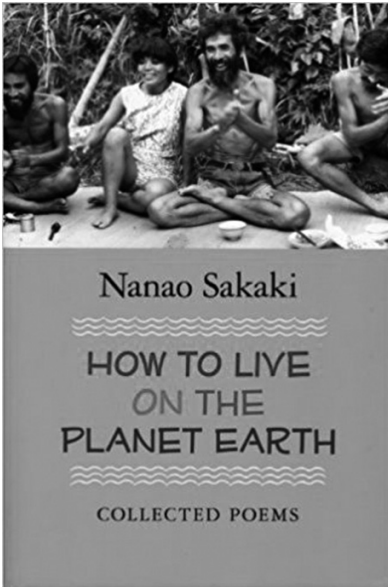
ナナオ・サカキ

ゲーリー・スナイダーは、日本のすぐれたヒッピー詩人ナオ・サカキ（一九三二—二〇〇八）の友人だった。二人は日本やアメリカ西部で、長期にわたる山行をともししている。

彼は鈴木老師の死後何年か、禅センター界隈で多くの時間を過ごした。私はナナオ・サカキに、鈴木老師に会ったことがあるかと訊ねてみた。

あるよ。二回会ったねえ。二回とも、サンフランシスコのページ・ストリートにある禅センターだったよ。最初の時は、リチャード・ベーカーに連れられていった。彼が紹介してくれたんですよ。「ハイ（エヒ）」と挨拶すると、鈴木老師も「ハイ」と応えたよ。

「英語で？」私は訊ねた。



10. ナナオ・サカキの評伝『Nanao or Never』の表紙

そう。他の誰もが英語を話していたし、我々も話せなかったからね。それに、「ハイ」ってそんなに難しい英語でもないよ。

「あなたは『ハイ』と挨拶した。それで？」

それだけですよ。「ハイ」で終わり。それでじゅうぶん。僕には彼の偉大な魂がわかったし、彼にも僕がわかった。

二回目のときは、彼が亡くなる間際でした。ゲリー・スナイダーに連れられて、僕たちは彼を訪ねた。

そして前のときとまったく同じ会話をしたんですね。

「ハイ」

「ハイ」

そして二人とも軽く頭を下げた。

その他のアーティストたち

フィリップ・ウェイレンに、ビート・ジェネレーションには誰を含めたものかと、訊ねてみたことがある。彼の答はこうだ、「ビート・ジェネレーションとは幻影さ」。この言葉に導か

れ、私は彼らの人間関係を考えてみた、すると今回この記事で言及した人々のことが心に浮かんだ。いくつかの組織もだ。A A A SはC I I S (the California Institute of Integral Studies) となり、教育機関として高く評価されている。

禅センターには、詩人に比べてもはるかに多くのアーティストがいた。鈴木老師の弟子の多くが、S F A I (サンフランシスコ・アート・インスティテュート) で学び、また教えていたことがある。そこはノース・ビーチ地区の端に位置しているが、またノース・ビーチ以上にビートニクとの関連が深い場所もないのだ。さらびやかな詩人・ミュージシャン・画家のダニエル・ムーア (一九四一―) は、マイケル・マクルーアの友人で、ノーマン・ステイゲルメイヤーから禅センターを紹介された。ノーマンは六〇年代前半にアート・インスティテュートで教えていた。

私は水曜日の夜の講座に参加しはじめた。『ウインドベル (風鈴)』(禅センターの月刊誌) を読んだ。ほぼ毎朝、かなり長く坐った。欄干を磨き、講堂を掃いた。禅 (の本) を読み、家で香を焚いた。自分用のぶ厚く詰め物をした黒い坐布を持ち、家でも坐った。ジョイ

ント (マリファナ煙草) を吸い、坐った。坐るのが上手になった。禅の真髄をこの手で掴んだとまでは言わないけど、講義に出席し、そして鈴木先生がたどたどしくはあってもつねに表情の豊かな英語で話す法話を聞いた。先生の長い沈黙、優しい月のような顔、気取らない温かな表情、我々が深遠な秘密にあずかっているのだという雰囲気、ここサンフランシスコでも禅は大いに見込みがあると感じた、一九六三年から六四年頃のことだ。

ダニエルは創作と著作を続け、六〇年代後半のベイ・エリアを盛り上げた「フローティング・ロータス・オペラ座」を主宰した。のちに彼はアレン・ギンズバーグとともにタサハラを訪れ、詩の朗読をおこなっている。

詩人で出版業者でもあった、ローレンス・ファースティング・テイ (一九一九―) の「シテイ・ライツ・ブックストア」は、ノース・ビーチの中心にあった。彼はギンズバーグの「吠える」を出版したかどで猥褻罪で逮捕されたが、その後、重要な裁判闘争に勝利した。禅センターの催しではよく彼に挨拶したものだし、それより何年前、禅センターのグリーン・

ガルチ農園メデイスカヴァリー・ブックスの瞑想庭園を一人で歩いていて、彼を見かけたこともある。「シテイー・ライツ」の何軒か隣にはフレッド・ロスコの「デイスカヴァリー・ブックス」があった。フレッド・ロスコはタサハラ地主の一人で、リチャード・ペーカーに禅センターの僧院を建ててはどうかと勧めたうちの一人でもある。

禅センターの初期の生徒のうち何人かは、もともとノース・ビーチで活躍していた。スタン・ホワイトはあご鬚を長く伸ばし、セバスチャンと呼ばれていた。彼はそこらあたりの下世話なスキヤンダルに通じていて、なかにはジャニス・ジョプリンやコメディアンのレニー・ブルース（一九二五—六六）の噂もあった。「シテイー・ライツ」のはす向かいのナイトクラブ「コンドル」で、トミー・ドーシー（一九〇五—五六）が出演していた頃、ドーシーはレニー・ブルースと同居していた。クラブでいちばんの出し物は、アート・インステイチュートの学生で、巨乳のトップレスダンサーとして有名になったキャロル・ドダ（一九三七—二〇一五）だ。メル・ウィツマン（一九二九—）はアーティスト・音楽家で、テリー・ライリー*19（一九三五—）の名曲「FC」の中で、ライリーと一緒にフルートを演奏している。パークレーの禅セン

ターで、ウィツマンは鈴木老師の手で得度し、今でもそこで住職をしている。

グレゴリー・コーン（一九三〇—二〇〇二）は、ギンズバーグ、ケルアック、バロウズとつき合いがあった詩人たちのなかでもいちばん若かった。彼は刑務所に入っていた時期があり、生き延びるためにマフィアとも近い関係を持っていた。彼のイタリヤ的な知性は歪んでしまい、酔っ払ってエンリコ・バンドウッチを人前で口汚く罵る羽目になった（事件はブロードウェイの有名店「エンリコス」で起こった）。そのあとフラフラになって家路に向かう途中、コーンは何人かの警察官の手で暗い路地裏に連れ込まれ、手酷い暴行を受けて入院させられた。彼は病院からサンフランシスコ禅センターに行き、回復のためグリーン・ガルチ農園に移るようになった。

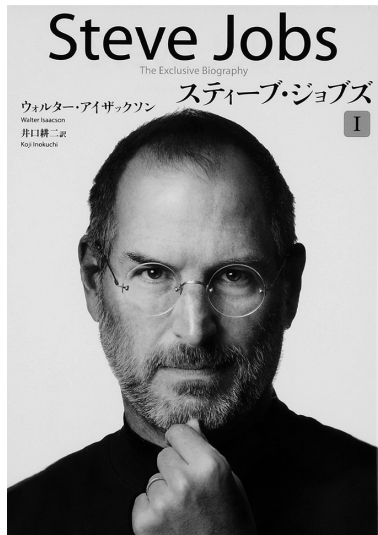
リード大学は、ここまで語ってきた話と多くの糸でつながっている。すぐれた詩人やアーティストたちにとどまらず、鈴木俊隆の弟子たちがここから登場している。この二つの糸の双方とかがわりがあった教授の一人がロイド・レイノルズ（一九〇二—一九七八）*20で、文章創作や芸術を教えたあと、これらをカリグラフィ*20と統合した。スナイダー、ウエイレ

ン、ウエルチらは、彼の教えと文字芸術を熱心に学んだ。レイノルズは、サンフランシスコ禅センターで鈴木老師に何度か会っているし、タサハラでいちど講義もしている。彼のカリグラフィイーは、一九六八年に撮られたタサハラの写真にもリード大学を訪れ、何度かの講義とともに短い接心を行っているが、病のため途中で去ることになった。

ステイブ・ジョブズ、チョギヤム・トゥルンパ、ジャック・ケルアック

ステイブ・ジョブズ（一九五五―二〇一一）は、このレイノルズの後継者ロバート・パラディーノ（一九三二―二〇一六）からカリグラフィイーを学んだ。パラディーノはその教程の中に、レイノルズとともに撮った三〇分の教育用映像を含めている。その情熱を心に刻んだジョブズは、最初のマック製品でワープロ用の多彩なフォントを採用することになった。PCもその先例に従っている。ジョブズはロス・アルトスの「ハイク（俳句）禅堂」で参禅をはじめたが、ここでは鈴木俊隆が法話を行ったことがあるし、彼の最もよく知られた著作（ジョブズのお気に入りでもある）『禅マインド・ビギナーズ・マインド』の内容もそこから取られている。ジョブズ

ズの禅の師匠は乙川弘文（おとかわこうぶん）（一九三八―二〇〇二）で、永平寺で数年間の修行を積んだあと、ハイク禅堂の住職になったが、最初の数年間はタサハラで我々を教え導くことのほうにより多くの時間を割いていた。

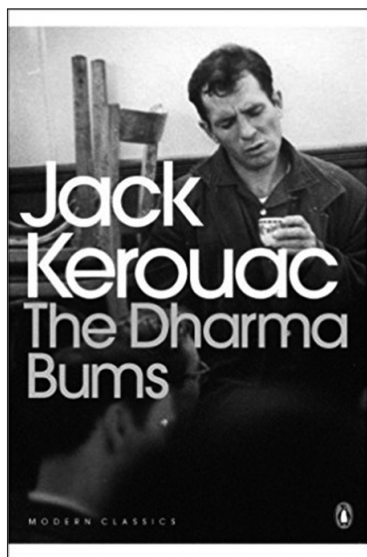


『ペーパーバック版 スティーブ・ジョブズ I』（講談社）の表紙

チョギヤム・トゥルンパ（一九三九―八七）は、一九五九年にチベットから亡命した高僧（リンポチエ）であり、化身ラマ（トゥルク）である。曹洞宗以外の仏教の師で、トゥルンパ以上に鈴木老師と親しかった人物はいない。トゥルンパは老師を「アメリカにおける父親」にして、西洋で彼が初めて会った狂っていない人物と呼んだ。ピートニクの詩人たちの多くが、トゥルンパのもとで学んでいる。アレン・ギンズ

バーグは、彼を師として何年も過ごした。ダイアン・ディブリマヤ、『裸のランチ』を書いたウィリアム・パロウズ（一九四一―一九七）も彼のもとで学んだ。ギンズバーグと詩人アン・ウォルドマン（一九四五―）は、一九七四年にトゥルンバのナーローパ大学の中にジャック・ケルアック・スクール・オブ・デイスエンボディード・ポエティクス学校を設立し、米国の詩人を惹きつけた。ゲリー・スナイダーは一度そこを訪れたことがあるが、夜の乱痴気騒ぎなどの雰囲気合合わなかったようだ。

ジャック・ケルアック（一九二二―一九六九）と鈴木俊隆の道は一度も交わることがなかったが、禅センターの生徒の多く



11. ジャック・ケルアック『The Dharma Bums』表紙

が、ケルアックの作品、とくに『路上（オン・ザ・ロード）』『ザ・ダルマ・バムズ』（ともに一九五七年）が、禅への最初の興味をかき立て、より意味深い人生を求めるときつかけとなつたと言う。何人かはケルアックと、彼の法外な友人ニール・キャサデー^{*21}（一九二六―一九六八）を直接知ってもいた。精神科医ロバート・ウォルター（一九四四―）はケルアックの親友で、彼とニューヨークで一緒に暮らしていた。彼らは野球をし、ウォルターにとつては新鮮な精神世界についての長い対話を交わし、夜になるとバーに行つた。ケルアックはボブ（ロバートの愛称）を彼のセラピストと呼び、ボブはケルアックを禅師と呼んだ。彼らは数年のうちに、禅について読んだり話したりする段階を卒業し、最初はニューヨークの臨済宗の僧・嶋野栄道（一九三二―）、のちに鈴木俊隆のもとで数年にわたって参禅することになる。

現在

この文章で触れた人物のほとんどはもうこの世にいないが、スナイダー、マクルーア、デ・プリマ、加藤、ベーカー、ワ

イツマンは皆八〇代で、彼らなりのやり方で実践を続けている。コヨーテは執筆と演技を続け、禅僧として修行を行っている。渡米した鈴木老師に最初に会っている加藤は、八七歳にしてロサンゼルスの禅宗寺で英語と日本語の法話を続けている。

鈴木老師はこれらの人々にいかなる影響を及ぼしたかというのが私への質問だった。彼は自らの役割を果たし、種々な人々に対する大きな貢献を、あくまで静かにしたのでと言おう。彼自身がまた、周囲の人々に少なからず影響を受けていた。それは彼の強みの一つでもあった。老師は自らを「ア・フレンド・イン・ザ・ダルマ」〔法友〕と呼び、ときにはわたしが師であなたたちが弟子であり、そしてときにはあなたたちが師でわたしが弟子なのだ」と言っていた。日本とアメリカのどちらの寺でも、彼は財産や名声、社会的地位によつて特別な待遇をすることはなかった。教師の存在は欠かれないものと考えていたが、教師より前から教えはあったのであり、教師が口にしたことではなく、私たちがわかち合う言語では表せないリアリティ（そこには人も自己も存在も無い）こそが教えなのだと考えていた。

老師はときどき、トゥルンパと同様に、「最初の考えが最上の考え」というフレーズを使った。この言葉は彼ら二人、とくにトゥルンパのものとされることがある。だがこれは、五〇年代前半からギンズバーグとケルアックが執筆上の信条としていたものであり、正確にこの通りの言い方ではなかったとしても、当時の音楽、芸術、そしてビートニクを含む文学の中に、その精神は沁み渡っていた。彼らの靈感の源の一つである、一世紀半前の詩人ウィリアム・ブレイク（一七五七—一八二七）は書いた。「芸術では最初の考えが最高である、それ以外では二番目の考えが最高だ」。彼の精神の血脈は、今もなおおびりはらり続けている。

※本文中のすべての引用資料（アラン・ワッツとダイアン・デイブリマのものを除く）は、cuke.comのチャドウィックによるインタビューにもとづくものである。

Photo 1.8.9 / 『禅は、今（ここ）』（サンガ、二〇一四）より。

1. Photo courtesy of the San Francisco Zen Center/Photo by Rowena Petree Kryder

8. Photo by Minoru Aoki

9. Photo by Tim Buckley

Photo 2.3.4.5 / ナイユマー・チャネウィック氏提供 (<http://www.cuke.com/>)

【注】

- * 1 ビートニク (Beatnik) 一九五〇年代にアメリカで起きた詩の運動。およびそれに端を発する新しい文化潮流を指す。代表的人物にジャック・ケルアック、ゲイリー・スナイダー、アレン・ギンズバーグ、ウィリアム・S・パロウズ、ニール・キャサディなど。
- * 2 般若心経の中の「無苦集」の箇所。
- * 3 般若心経の中の「無得」の箇所。
- * 4 カリフォルニア州の地名 Marin と、京都にある山形有朋の別邸・無鄰菴むらなみにちなんだものかもしれない。
- * 5 ジョアン・カイガー (Joanne Kyger) 一九三四—二〇一七 ビート詩人。自身の坐禪の体験が色濃く影響された作品で有名。スナイダーの元妻。
- * 6 ヒューマン・ビー・イン (Human Being) 一九六七年一月一日にカリフォルニア州サンフランシスコのゴールデン・ゲート・パークで開催されたイベント。二万五〇〇〇人が集まった。一九六〇年代のアメリカ、ことに西海岸は当時合法だった LSD の影響がもたらすサイケデリック文化が開いた時代であった。後に『カッコーの巣の上で』を発表しベストセラー作家となるケン・キージーのメアリー・ブランクスターズなどさまざまなサイケデリックグループが生まれ、反戦運動や政治的な意図もからみ合って、多くの音楽イベントや集會が開かれていた。その中でサイケデリック文化をけん引するタブロイド誌『オラクル』が中心地ヘイト・アシユベリー地区で発刊され、その関係者たちが中心となって企画されたのがこの「ビー・イン」とあるという。文化的革命をめざす者 (ビッピー) と政治的革命をめざす者 (政治的過激派) とを、ひとつにまとめることが目的の一つだった。それは本稿のチャドウィック氏の引用にもその様子がうかがえる。参考『アシッド・ドリームズ』CICA、LSD、ビッピー革命 マーティン・A・リーナブルス・シュレイン [著]、越智道雄 [訳]、第三書館、一九九二)
- * 7 テイモシー・リアリー (Timothy Leary) 一九二〇—一九六八 心理学者。六〇年代にハーバード大学で LSD の研究を行い、カウンセラー・カルチャー、サイケデリック・カルチャーの教祖的存在となった。
- * 8 デイガー (Digger) 一九六六—六八年にサンフランシスコのフラワー・ムーブメントの中心ヘイト・アシユベリーを拠点に活動した、前衛的な演劇コミュニケーション。

* 9 ヘイト・インディペンデント・プロプライアター (HIPS) 『デイガー』よりは政治的に穏健な集団で、しばしば『デイガー』による嘲りの対象になった。

* 10 ジェリー・ルービン (Jerry Rubin) 一九三八—一九四九 左翼主義活動家。一九六八年の民主大会暴動事件の首謀者として起訴された、いわゆるシカゴ・セブンの一人。

* 11 リチャード・アルバート (Richard Albert) 一九三一—ラム・ダスとして知られる。インドに旅行に出かけ、帰国後に精神の旅路へのいざないを記した『ビョブス・ナウ』(一九七一年)は、七〇年代の若者のバイブル。ステイプ・ジョブスが傾倒し、同じくブルーム・カロリー・ババのインドのアシュラムを訪ねたことでも知られる。

* 12 ノースビーチはサンフランシスコのビートシーンの中心地でビート発祥の書店『メイ・ライツ』がある。

* 13 馮家福 道教の導師・翻訳者。

* 14 禪の修行道場では四よ九のつく日は休日にする伝統がある。

* 15 ドナルド・アレン (Donald Allen) 一九二二—二〇〇四 現代アメリカ文学の有力な編集者、翻訳者、出版人。

* 16 The New American Poetry, 1945-1960, Donald Merriam Allen

* 17 リチャード・ベーカーは鈴木俊隆の弟子で、サンフランシスコ禅センターの二代目の住職となった。

* 18 アウエルハーン (Auerhahn) はドイツ語でライチョウ。

* 19 テリー・ライリーはステイプ・ライヒやフィリップ・グラスと並ぶミニマルミュージックの巨匠。

* 20 カリグラファーとは西洋や中東における、文字を美しく見せる芸術。東洋の書道とも共通するが、毛筆を使わないため表現は異なる。

* 21 ニール・キャサディはビートの中心人物で『路上 (オン・ザ・ロード)』の登場人物デイーン・モリアーティのモデルになった。

鈴木包一

曹洞宗高草山 林叟院住職

師としての、
父としての
鈴木俊隆

渡米以前の俊隆老師の足跡。
その人と坐禅と教え

アメリカに坐禪を伝えた鈴木俊隆は渡米前、静岡県焼津市の古刹である曹洞宗・林叟院の住職を務めていた。鈴木包一師は俊隆の長男で、現在の林叟院の住職である。包一氏にとって俊隆は父であり、また禅僧としての師である。俊隆の渡米前の姿、弟子として受け継いだ教え、そして子としての思いをうかがった。

父・鈴木俊隆の教え

林叟院の住職となる

鈴木 私の父であり師匠でもある鈴木俊隆は、私が二〇歳のときにアメリカに行きましたからね。当時、私はまだ大学生で、闇の中を悶々としているときだね。それで二七歳で、父が住職をしていた林叟院の住職になりました。

父がアメリカに行って私が住職になるまでは、この寺は鈴木俊隆のかつて弟子だった鈴木祖光そこうという方が、住職を代務してくださったんですね。

当時この寺の住職に二七歳でさせてもらったというのは、珍しいことでした。別に私が適格者だったわけじゃなくて、皆さんが理解してくれて、「父親がアメリカでがんばっているから、後は心配ないようにしよう」と思ってくれたということですね。

——ご自身はお父さんの後を追ってアメリカに行くとはされなかつたんですね。

鈴木包一 すざき・ほういつ

1939年、静岡県生まれ。駒澤大学仏教学部卒業。大本山永平寺修行の後、永平寺単頭就任、同副監院、永平寺後堂を歴任し現在は顧問。林叟院住職のほか岡山県洞松寺専門僧堂西堂師家。年に数回、サンフランシスコ禅センターなどに赴き外国人への坐禅指導をしている。

鈴木 最初、学生のころはそう思ったんですよ。父親も「お前も英語を勉強して、私のところへ来るか」と言うから、それなら行ってみようかなと。私は当時は剣道にまい進していて、それをやめて英語の勉強をしようと決めたけど、できなかったね（笑）。

——剣道一筋ですか。

鈴木 「また剣道はじめた」と師匠（鈴木俊隆）に報告したら、「まあ、それもいいだろう。そうすればいいよ」と。

結局、俊隆生前にはアメリカに一九七一年、彼が亡くなる寸前に行っただけです。

林叟院の歴史

——林叟院は、非常に由緒のあるお寺ということですね。

鈴木 そうそう、このお寺はね、この辺では歴史のある寺なんですよ。室町時代にできてから五五〇年ぐらいたっています。そのうちの五〇年は私が住職していますね。曹洞宗では有名な鉄文道樹てつぶんどうじゆという僧がこの寺で出家しています。江戸の中頃の人ですね。

——鈴木俊隆老師の師匠は当時の林叟院の住職だった玉潤祖温老師ですね。

鈴木 鈴木俊隆の肉親の父親は鈴木祖岳です。私のお祖父さんにあたります。俊隆は祖岳のもとで得度はしましたが、法を継ぐ弟子になったのではなくて、師匠としては玉潤祖温につきました。その祖温の師匠が祖岳で、法の上では鈴木俊隆の祖父、私の法の曾祖父になります。

——林叟院は禅の専門道場だったのでしょうか。

鈴木 専門ではありませんが、戦前はここで寝泊まりして修行をしていた雲水さんたちが何人かいました。もつと大昔はさらにたくさんいたと思いますね。明治になってからもこの寺には鈴木俊隆が住職になるまで、家族はいませんでした。家族で入ったのは私たちが最初です。

海外との交流

——鈴木俊隆老師は欧米で大変有名ですから、尋ねてこられる人も多いのではないですか。

鈴木 よく来ますね。最近は直接俊隆を知っているという人は少なくなりましたけど、初期のお弟子さんのメル・ワイツマン宗純とかアンダーソン天眞とかね、主な弟子はよくここに来ましたね。『Crooked Cucumber』という俊隆の評伝を書いたデイビッド・チャドウィックは今もよく訪ねてきます。

——新しい世代の人も、訪ねてきますか。

鈴木 多いですね。禅を志す人たちの間で、林叟院に寄ってから永平寺に行くというのが、どうもセットになっているみたいです。

——ここに泊まって修行していくのでしょうか。

鈴木 どうでしょう。ここは、現在は修行道場というよりも、孫も一緒に住んでいますし、ファミリーテンプルですから（笑）。二〜三日泊まっていて、朝は坐禅をして、昼は掃除をしてという、それだけのことです。

父親・鈴木俊隆との思い出

——俊隆老師の教えて印象に残っていることは何でしょうか。

鈴木 思い出せばいろいろあるけど、一番強烈なのはね、うちの師匠は忘れっぽいんですよ。物忘れが多くて、なんでも忘れる。ところが私もね、小学校に入ったら、一年生のときから忘れ物が多い。師匠は自分に似た子どもができて困ったと思っただけでしょうね。

私があんまり忘れるものだから、あるとき学校の先生に「今度は許さない、取りに行つてこい」と叱られて、家に忘れ物を取りに行かされました。何を忘れたか忘れましたが（笑）。

家に戻ったら師匠がいてね、「お前、今ごろどうしたんだ」と言うから、「忘れ物をした」と答えた。そうしたら「何を忘れたんだ」と聞かれて、「これこれ」と言ったら、「そんなもの忘れるやつがいるか。こつちへ来い」って私をわきに抱えて、お寺の裏にある池にポーンと放り込みました（笑）。骨身に染みるようにしたんでしょうね。

——それで忘れ物は治りましたか。



鈴木 母親がびっくりしてね、「あなた、何をなさるんですか！」と言って、池の中に飛び込んで、私を拾い上げたんです。こんな浅い池ですけどね。師匠は怖い顔をしてにらんでいて。でも、忘れ物が多いのは治らなかつたなあ。

——俊隆老師は厳しい方だったのですね。

鈴木 私たち姉弟は怖がっていました。少なくとも私は父親の膝へ入ったことを覚えてないですね。

鈴木俊隆の渡米前夜

息子の徴兵

鈴木 一番下の弟（乙有^{おとひろ}）は今アメリカにいて、バス会社を経営していますが、高等学校の途中で、父を頼ってアメリカに行きました。アメリカの父のお弟子さんに宿題を助けてもらったりして高等学校を卒業しましたが、英語が全然わからなかつたから、大変だったようです。それから農業のアルバイトに行ったり、床屋さんの修業をしたりしているうちに徴兵された。ベトナム戦争の最中で、徴兵期間三年のうちの一年はベトナムにいたんですよ。

——息子が軍隊に入るのを、俊隆老師は反対されなかつたのですか？

鈴木 周りの人は「なんで子どもを戦争

にやらせるんだ」とか言ったらしいですが師匠は「私が行けと言ったんじゃない。本人が決めたことだ」と。そう言えばアメリカという国は、個人の決めたことをみんな尊重しますね。

——当時の俊隆老師には、こんなエピソードがありますね。近くで反戦デモがある日の坐禅会で、若い弟子が「海の向こうで戦争をしているのに、なぜ、ここでみんな集まっているのですか」と質問したら、普段は温厚な老師が「愚か者め、愚か者め、時間を無駄にしておる」と、警策でその弟子を何度も打ちつけたと。

鈴木 そのときは激怒したそうですね。人のことじゃない、ということですよ。「お前さんのことだろう。人に聞いてどうするんだ」、「おまえは時間を無駄にしている、このほうが大事なんだ」と。

根本はね、一人一人が平和な気持ちになることが大切なことだと伝えたかった

のでしよう。禅とは天地は一つだ、万物は一つだ、同一であるということを経験する道だから、それを理念や観念で何か言うのは、お前さんはまだわかってないと、いうことではないでしょうか。

——そのとき俊隆老師は、「自分の靴の紐ひもも結べないのに、何をしようというのだ」とおっしゃったと伝えられています。足元を見ろということでしょうか。

鈴木 一人一人が、一人一人の内の世界を持っていきますからね。師匠はよく「お前さんがそう思っているときには、この宇宙全体がそれだ」って言いますね。

坐禅会で「坐禅していても、セックスのことばかり考えてしまい仕方がない」と質問されて、「おまえさんがセックスと言った瞬間に、全宇宙がセックスになっちゃった」と答えたという話があります。お前さんの世界なんだ、他人の世界じゃないんだ、ということを常に

思っていたんですね。

やっぱり一つの基本というか、きちつとした物差しを持っていけば、何を言われてもそれに触れて出てくる言葉は的外れないですね。頭で考えたことは的が外れるときがあります。

師匠の本を読んでいたね、「あんなに、常に深く考えていたかなあ」って思いますが。日本にいるときはね、物事をああいふふうに見ているのを感じさせない人でした。日本では、それを出すことができなかつたのかもしれない。

——俊隆老師ご自身がアメリカで養われたということもありますか。

鈴木 いや、むしろ自分の持っているものが、業が吐き出される場所に行つたという感じがします。門戸が開いたというね。やつと、自分の世界に入ったというずつと、よその国へ行きたいと思つてたようです。

日本の歴史を見てみるとね、明治に

なつて開国して、そのあとに廃仏毀釈があった。鈴木俊隆は明治三七（一九〇四）年生まれでしょう。そのような歴史の流れをなんとなく見えてきているわけです。それで、これではよくないと。よその国の人に理解してもらわないと困るということをおもつたんでしょうね。

アメリカで花開く

鈴木 アメリカへ行く前に、俊隆は中国の満州へ行きました。満州へお寺をつくつて禅を教えようとしたんでしょうね。だけど戦局が悪化して、命からがら日本へ逃げてきた。

結局アメリカに行きましたが、よその国ならどこでもいいと思つていたのかもしれないですね。

——渡米の計画は家族に相談されていたのですか。

鈴木 いや、俊隆は自分で決めていまし



た。家族といっても、母は亡くなっている。私ら子どもしかいなかったからね。昭和三五（一九六〇）年のころですから、戦争が終わってまだ一五年ほどです。アメリカに誰か来てもらいたいというお寺があるという話を聞いて、その相談をしに師匠は宗務庁へ行った。その帰りに、東京で大学生をしていた私のところへ寄りました。電車の中で、「アメリカへ行くけど、いいか」と俊隆が聞くから、

「ええ、なんでアメリカに行くの？」ってなりました。「何しに行くの？」と聞いたら、「坐禅しに行くんだ」って。それで私が、「坐禅なら日本でもできる」と言ったら、「いや、アメリカで坐禅がしたい」と。アメリカに曹洞宗のお寺があって、そこでみんなに坐禅を教えてやりたいと言う。「じゃあ、行きたければ行けばいいけど、生活費と学費だけは送ってもらいたい」と言ったら、「それはお金を送られてきたことはなかったですね。」

——それは困りましたね。俊隆はアメリカでは、金銭的に大変だったんでしょうか。

鈴木 そう、俊隆が行ったサンフランシスコの桑

港寺は給料が少なくて、法事に行ったりメンバーの家に行ったりするとお布施をくださるので、それを頼りにしていたらしいですね。

——財政的にはともかく、俊隆老師はアメリカ人に坐禅を教えに行った。

鈴木 そうですね。向こうへ行って早々に桑港寺の門のところへね、「朝、坐禅しているから、来たい人は参加してください」と英語で書いた紙を張ったそうです。それまでの住職は曹洞宗の日本人のために滞在していたので、一般のアメリカ人に向けて開かれた坐禅会をする人はいなかったんですね。

そうして一人、二人とアメリカ人が来るようになったそうですが、あんまりお寺のメンバーの人たちは快く思わなかった。

——なぜでしょうか。

鈴木 アメリカ人でも普通の人が来るな
らいいけど、たとえば毛布に穴開けてか
ぶっているヒッピーのような恰好の人ば
かり来ていたんだからね(笑)。

——俊隆老師は日本にいるときから英
語で説法する準備をしていたと伝わっ
ていますが、どうだったのですか。

鈴木 英語は中学生のころから、ずっと
勉強していたようです。逗子の開成中学
へ行ってきましたね。そのあと駒澤大学で
は、英会話の先生のノナ・ランサムとい
う人に学んでいます。その方は清朝最後
の皇帝、満州国の愛新覚羅溥儀(あいんかくらふぎ)の英語の
先生だったそうです。日本へ来て、駒澤
大学の先生になってたんです。

ノナさんは日本語がぜんぜんできない
から、俊隆は通訳のような、ヘルパーの
ようなことをして。そのときに英語だけ
でなく、英語の文化圏の人たちのもの
の見方とかも身に付けたんじゃないですか
ね。

坐禅を広めた思い

——今でこそステイブ・ジヨブズの
影響もあって、鈴木俊隆老師の名前は
日本で広まっていますが、少し前まで
はあまり知られていませんでした。

鈴木 亡くなってから、もうちよつとで
五〇年。それでやっと鈴木俊隆という人
がいたことが、日本でも知られてしまし
たね。

私は何かに書いたけど。坐禅というも
のがアメリカへ、あるいはヨーロッパへ
伝わっていけば、鈴木俊隆のことは忘れ
てもらったほうが、本人も「こざつぱり
していい」という気になっているんじゃない
かなと。まあ、本人が忘れっぽい人
だからね(笑)。

——今では禅は欧米で広がっています
が、俊隆老師の功績も大きいのではな
いですか。

鈴木 まあ、よその国へ行ったら、そ
れぞれの国でそれぞれの禅が花開いてい
くんだよね。日本の禅だとか、何宗の禅
だとか、言うことはできなくなるよね。
ただ、真つすぐに禅が伝わってほしいわ
けですよ。形はどうでも、何を着てい
ても、坐禅の精神が真つすぐなものであれ
ばいいと。鈴木俊隆が伝えようとしたも
のがそういうものだったから、みんなが
ついてきたんですよ。

有名になろうとか、大きな団体にしよ
うとか、弟子を大勢にしようとか、そ
ういう気持ちはなかった。ただ、これをわ
かる人にわからせたいという、そういう
態度だからこそ、人がついてきたんだと
思います。

林叟院の坐禅、俊隆の坐禅

呼吸の大切さ

——俊隆老師は『禅マインド ビギナーズ・マインド』で「呼吸に集中することを書かれています。しかし曹洞宗の坐禅会でそれはあまり言わない印象ですが、包一師はどのような指導をされていますか。

鈴木 呼吸は大切だということは、変わりないと思うんですよ。だけど、道元禪師も「鼻息かすかに通ず」と言うだけで、長くしなさいとか短くしなさいとか、腹式呼吸でしなさいなどは言わない。ただ姿勢をよくして「鼻息かすかに通ず」とすると、自然にその呼吸になる。

だから呼吸に対してあまり言わない。ただどアメリカ人には呼吸を言わないとわからないから、俊隆はそう指導したの

かもしれないね。

鈴木俊隆がよく言っているのは、「呼吸は、ドアが風で閉じたり開いたりするのと一緒だ」ということですね。呼吸は自然に向こうから吹いてくる風でドアが開いたり閉まったりするようなもので、それは自分の意思のものじゃない。でも、自分がそういう呼吸をしているということだけは、わかっている。いつてみればそれを観ている。そういうもので満たされた坐禅……。しかし、その状態が壊れても仕方がない。それをどうする必要もない。また、気がついたときには直っている。気がつけばいいのであって、「これはいけない」と思うと、そっちの深みにはまっていくからね。鈴木俊隆もそういうことを言いたいんじゃないかな。

マインドフルネスの源流

——俊隆老師をマインドフルネスの源流の一つにみる見方もありますね。

鈴木 西洋にはご利益と言ったらなんだけど、これすると健康にいいとか、精神的にいいとか、いろんな効果が求められますからね。

でも、鈴木俊隆は「こうしたら、こうなる」ということは言わないでしょう。せいぜい言っても「なるかもしれない」、「こういうふうになるであろう」ぐらいです。「坐禅をはじめたら、いつ終わるんですか」と聞かれたら、「いやあ、一生続く」と答えた(笑)。ここまでというものがない。これを得たらいいというものもない。そういうものがないというのがいいんだと。

俊隆のエピソードで、接心に初めて参加したアメリカ人の女性が、「もう、こんなところにいられません」と帰ろうとしたら、「あなた、ここを出てどこへ行くんですか。あなたの行くところは他にありませんよ」と言ったって話が『禅は、今ここ』にありますよね。林叟院でも私は朝の坐禅に来る人たちに「あなたたちはいるるところを回って来たでしょ



鈴木俊隆老師の筆による揮毫(きごう)

うけど、ここが終着点だよ」と言います。ここより他に行くところはないんだから、ここにいればそれでいいと。

今まで右往左往したけれども、これが最終的な目的地であると。この目的地はどこまで続くかわからない。今の人は、私もそうだけど、何か不安になったり、恐ろしさを感じたりするというのは、限りない世界というものを意識できないからです。自分のいのちや、ありとあらゆるものが限らない世界であり、限度がないということ、そういうものだということとがわからない。それが感じられないと、不安になったりする。もともとが限りのないものだということが、坐禅をしていささかでもわかってくればいいですね。そうは言うけれども……なかなかね。瞬間、そうだなあとと思う時が無きにしてもあらずだけど。だけど、明日死んだって大丈夫、広い世界の話なんだから大丈夫と言っても、それでも明日死んだら困るなあと。あれもしたいし、これもしなきゃなんないし、それもまたね……。

家族

生きとし生けるものの悲しさ

——先ほど、俊隆老師が渡米するときにはお母様がおられなかったとお話いただきました。『Crooked Cucumber』にはお母様のエピソードがありますが、不幸な形で亡くされています*。差支えなければ、お話しただくことはできますか。

鈴木 母が亡くなった時のことはね、はつきり覚えていますよ。私はあまりそのことを人に話したことはないんですね。ただ、そのことを言わないでもね、人前で説法するときでも、そういう人間の悲しみとか、あるいは生きものの悲しさというようなものがね、伝わるようなそういう話があったと思います。

——それはたとえば業とか因縁とかそういうことですか。

鈴木 まあそういう、決まった言葉が当てはまらないかもしれないですね。そりゃ、仏教的にいえば業というかね、縁というか、そういうものであるかもしれないが。

誰かが作った業とか宿縁とかっていうとね、その人につながっている、その人の業というようなものを感じさせるけど、そういうものを超えた力みたいなものね。動かされている、法というかそういうものは感じるね。

業というとなんとなく、自分のしたことが自分にやってくるような、あるいは先祖がしたことが自分にやってくるとか、そういうものを感じさせるけど、誰しもある、誰しも持っている、生きとし生けるもの全てのものが持っている、あるいは生きていないものもそうかもしれない。

そういう天地を動かしている力というかね、それは無機質なもので、それは無我なものですね。……意思というか、そういうものがない。「どうしようか」とか、「ああしようか」とかいうものが働かない世界なんだな。それに動かされて我々はいるわけだよ。いや、動かされてというか、そのままにそれに従って、あるがままにやっているからね。その喜びはあります。と同時にその悲しみもある。ですから、人にとつては、悲しみとなるかもしれない、苦しみとなるかもしれないんです。

誰も恨むな

——俊隆老師は自分の子どもたちを集めて、「(犯人を)恨むのではない」とおっしゃったそうですが。

鈴木 「恨んではいけない」というのはね、その人のことではないと言っただよ。どこへも恨みをもって行きようのないも

のなんだ、どこへも。これが悪かったからだ、こいつが悪かったからだというものではない。突き詰めていけば、結局は自分のところに来る。それそれが自分のところへ来る。だから父親は「恨むならば、わしを恨め」と言ったの……

結局、父親が言った「恨んじやいけない」というのは、恨みをもっていくところがわかんないから。行き先がないんだよね……

本当に戦争というのはあれだね。いいものは残さないね。ベトナム戦争に行つて帰ってきたアメリカ兵たちもパニック症というかね、そういうものになっている人が大勢いるでしょう。自分がわかんなくなっちゃった人が。

—— 本には、犯人は、林叟院に突然やつてきて住み込みしていた人とあります。

鈴木 その人はね、お寺へ来たときは古い軍服のようなものを着ていました。戦闘帽もかぶっていました。一九五二年ぐ

らいだから、終戦から七、八年経つても、その当時はまだそういう恰好をしてその辺を歩いていたんだね。自分がわかんなくなっちゃったんだね。

そういう、そのときの様子をね、私は今まで息子たちにも話してないからね。まあ子孫にはね、自分が体験したことは話しておかなきゃならないけどね。それは大きく言えばね、生きとし生けるものの業といえ業だね。生きとし生けるものの、この有り様。ただそれを人間は、時には恨みを持つたり、時には感謝したりするんですね。

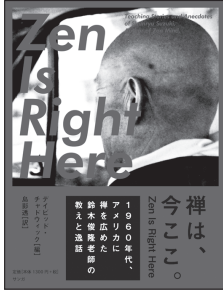
—— 貴重なお話を、ありがとうございます。ました。

鈴木 今考えると人間たちの、この、なっているか、欲望というかなんというかね、そういうものはいろんなものを生み出す、ということを感じますね。

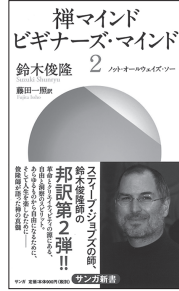
※関連の坐禅会は176頁を参照ください。
* 同書によれば、包一師の母 俊隆老師の妻であるちよさんは、戦後一九五二年に林叟院に訪れ止住していた僧侶の手にかかつて亡くなっている。

(二〇一七年六月二十八日、静岡・林叟院)

サンガの本 好評発売中



ISBN978-4-905425-68-7



ISBN978-4-86564-018-2



ISBN978-4-905425-16-8

サンガ新書055

禅マインド ビギナーズ・マインド

鈴木俊隆 著／松永太郎 訳 857円(税別)

ステイブ・ジヨブズが愛読した、禅のバイブル。世界24カ国以上で翻訳
アメリカに禅をもたらした、鈴木俊隆老師の記念碑的な禅の入門書。
20世紀初頭、鈴木大拙により欧米に紹介された禅は、1960年代、鈴木俊隆に
より実践的な禅となった。初めて禅の修行に触れ、坐禅を組むアメリカ人に向け
た法話集。

サンガ新書066

禅マインド ビギナーズ・マインド 2

鈴木俊隆 著／藤田一照 訳 900円(税別)

ステイブ・ジヨブズの師、鈴木俊隆の邦訳第2弾!!
革命とクリエイティビティの源にある、自由と洞察のスピリット。あらゆるものから
自由になるために、そして人生を楽しむために俊隆師が語った禅の真髄。

禅は、今ここ。 Zen Is Right Here

1960年代アメリカに禅を広めた、鈴木俊隆の教えと逸話

デイビッド・チャドウィック 著／島影 透 訳 1,300円(税別)

西海岸のカウンターカルチャーを磁石のようにひきつけた鈴木俊隆
とはいったい何者か？

サンフランシスコ禅センターやタサハラの禅心寺で、俊隆老師のもとで修行した当
時の若者たちが、時をへて語る老師との触れあいと、教えのエッセンス。